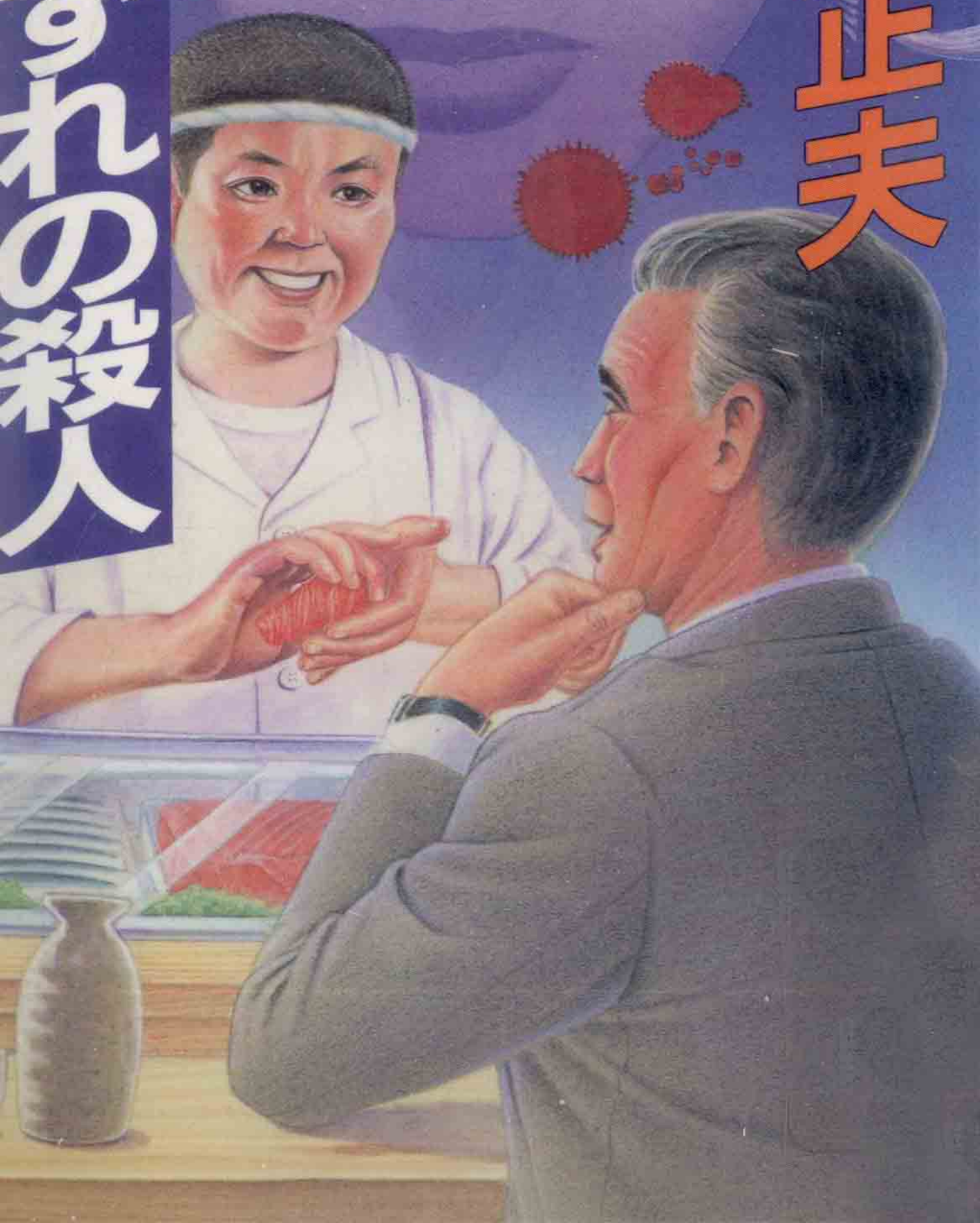


山村正夫

板前探偵包丁推理

季節はずれの殺人



季節はずれの殺人

一九九六年一月二十五日 初版発行

著者 山村正夫

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

〒一〇四

TEL 〇三(三五六二)二〇五一(編集)

〇三(三五三五)四四四一(販売)

振替〇〇―一〇―六一六―三二六

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

TEL 〇六(三一二)一五七三

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます



JOY NOVELS

板前探偵包丁推理

季節はずれの殺人

山村正夫

実業之日本社

季節はずれの殺人／目次

季節はずれの殺人

5

恐い魚の目

37

死の鮎ネタメツセージ

71

郷愁の殺意

107

献身の女

141

社員寮の死角

175

冷凍殺人死体

207

カバー・本文イラスト／田村直巳
装幀／サン・プランニング

季節はずれの殺人

1

「らっしやい。おや岩下さん、お久しぶりで……」

五分刈りの頭にねじり鉢巻、白の調理服の主人が、カウンターの向こうから円顔を戸口に向け、威勢よく迎えた。

冷蔵庫から和紙にくるんだインド・マグロを取り出し、左手に柳刃包丁を持って大トロ、中トロ、赤身（ツケ）の冊きくに切り分けると、目の前のガラスのケースに入れているところだった。左ききなのだ。

前日の閉店後ぜんぶを片付け、翌日の開店三十分前に並べ直すというネタは、もうあらかた揃っている。旬しゅんの新鮮な魚介類の生身が、食欲をそそる色とりどりの彩りで、冷蔵用のパイプの通ったケースの中を充していた。

午後五時半。円山町まるやまちょうの三業地さんぎょうちにほど近い、渋谷区神泉町しんせんちょうの一角にあるこの『鮭泉』は、ちょうど口

開けの時間に当たっていた。カウンターの前には、ほかの客の姿はまだ誰もいなかった。

「ビールになさいますか？ それともいきなり焼酎サワーで……」

「いや、酒は結構だよ。上がりをもらおう。ああ、こちらの若い人には、上鮭を一人前握ってやってくれないか。腹をすかしているからな」

警視庁捜査一課強行班三係主任の岩下駿平警部補は、店が空いているときの常席にしている、カウンターの右はずれの壁に接した椅子に腰をおろすと、隣りの二十代の男をちらと見やった。

『鮭泉』は、岩下が渋谷中央署の捜査課勤務だった頃からの、五年越しの馴染みの店なのである。

きちんとしたスーツ姿の初老の岩下と違い、はでなブルーのウィンド・ブレーカーを着たその若い男

は、かしこまってコ―デュロイのスボンの膝に手を置いてゐる。肩幅のがつしりとした逞しい体格をしているが、面立ちおもたの方は、まだ学生然とした童顔だった。

「そうだ。マスターは初めてだったな。紹介しよう。こちらは渋谷中央署の野武刑事だよ」

「野武です。よろしく」

学生時代に応援団にでも所属していたのか、よろしくをオスツと聞こえるような蚤から声で言つて、野武は角ばった姿勢のまま頭をさげた。

「おおい、上ガリを二丁……」

ウイスキーや焼酎のボトルの並んだ棚を背にした北園孝吉は、カウンターの奥の調理場に向かって声をかけると、

「ひよつとして、岩下さん、旦那は……」

と、まないた俎なに両手をつき、ネタのケース越しに身を乗り出して岩下を見つめた。

「そう。今夜は捜査の用で来たんだよ。マスターにもいろいろ聞きたいことがあつてさ」

彼は店の客からは、マスターとバーか喫茶店の経営者のような呼び方をされている。

岩下はエプロン姿の北園の細君が愛想よく挨拶あいさつをして運んできた、大きな湯呑のお茶を一口してから言つた。

北園は今年三十五歳だが、細君の町子の方は四つ歳上の姉さん女房である。ボブ・カットが和服によく似合う色っぽい美人で、客あしらいのうまい気さくなタイプだった。

調理場には、いま一人、ピンクのセーターにジーンズの若い娘が働いていた。

「それじゃあのコーポ青葉台の事件は、岩下さんのところの班が？」

「うん、うちの三係で受け持つことになったんだ」
「そうでしたか。さっき何台ものパトカーの音が、

けたたましくしたものですからね。家内の妹によろすを見に行かせたんですよ。そうしたら、山手通りの向こうにあるあのマンションで、殺人があったというじゃありませんか。いやあ、驚いたの何のつて。あすこの六階の部屋では、わたしも家内と暮しているし、お得意客も何軒かいらっしゃるんですよ。現に昨夜もうちから出前を……」

「実はそのことで、わざわざやってきたのさ。その出前が事件に関わりがあるもんでね」

「ええつ、何ですって！」

北園はギロツとした目を、大きくひんむいた。

「あのマンションの五階の503号室に、ウインド・ミルというアングラ劇団のオフィスがあるよな。経営者で演出家の堀江研一郎が、住い兼用にしている1LDKの部屋だ。昨夜、出前を届けたのは、そこじゃなかったのかい？」

「ええ、そうでした。中鮎を五人前——一人前ずつ

の桶でお届けしたんです。ですが、殺人があったのは、確か別な部屋だったんじゃないですか？」

「そう。503号室の真下に当たる、403号室だった。夕刊にはもう報道されていると思うが、今日の午後二時半頃、その部屋に住んでいる杉浦修治という秘密探偵社の調査員が、鈍器様の凶器で撲殺され、戸口を入れてすぐのLDKの床に倒れているのを、彼の愛人のホステス金子里恵が発見したのさ。

ただこれは、捜査の秘密事項として、伏せてある事実なんだがね。マスター、現場のダイニング・キッチンテーブルの上には、『鮎泉』の名前入りの鮎桶が、置かれていたんだぜ」

「そんな馬鹿な！」

小さな俎のような白木の付け場に、野武のための一人前の握り鮎を手早く握って、出した北園は、ムキになった口調で打ち消した。

「その杉浦さんとやらは、うちのお得意さんじゃあ

りませんよ。この店に食べにこられたことはもちろん、出前を取って頂いたこともないんです。どうやらほかの鮓屋を、利用されていたようでしてね。それなのにどうして」

「いや、これにはわけがあるんだ」

岩下は手をふった。

「そいつを説明する前に、昨夜503号室に出前をしたのは、何時頃だったか。そいつを先に知りたいな。現場での関係者からの聞き込みでは、その点がどうもあいまいで、はつきり憶えている者がいなかったもんだから」

「出前ねえ」

北園はうなずいた。

「君代、ちょっと来てくれや。岩下さんがお呼びだぞ」

と、調理場の入口へ足を運んで言うと、まもなく二十三、四の娘がカウンターへやってきた。

ストレートのロング・ヘアを腰までたらし、色白のぼっちゃりとした可愛らしい娘である。今年の一月頃までは、早稲田の料理屋の息子だという君代と同年代の若者が、板前修業を兼ねて出前をしていたのだが、家業を継ぐためにやめてしまったので、北園の細君の妹の彼女が、かわりに手伝いにくるようになったらしかった。

だが、しばらく『鮓泉』には御無沙汰つづきだった岩下は、君代と顔を合わせるのは初めてだった。「こちらが警視庁の岩下の旦那だ。昨夜、ウインド・ミルのオフィスへ出前を届けたのは、何時頃だったか、そいつを聞きたいんだそうだよ」

北園が引き合わせるのを待って、

「悪いな。仕事の邪魔をしちゃって」と、岩下は半白の髪のをさげた。

野武は付け場に並んだ鮓に、猛然と箸をつけている。

「あら、そんな……。捜査のお役に立てるんだったら嬉しいわ」

君代は野武の隣りの腰掛に坐ると、

「堀江さんから電話の注文があつて、わたしが鮎桶を風呂敷に包み、自転車で届けたのは、夜の九時頃だったと思います。劇団の方たちが何人かいらして、これから麻雀マージャンをするとところだということでしたわ」

と、カウンターに頬杖をついて言った。

2

「九時頃ねえ。そうか……」

「麻雀の件は、劇団員の供述とも一致してますね。」

主任……」

野武が甘海老の握りをほおぼってから、手帳を出してメモを取った。

「で、鮎桶をさげに行つたのは、今日の何時頃だったの？」

岩下が質問をつづけた。

「お昼前の十一時頃だったかしら。そのとき、戸口に桶が四つしか出ていないのを見て、おやつと思つたんです。でも、インターフォンの応答がなくてお留守だったんで、そのままいちおう持ち帰つたんですわ」

「私も変だなあとは思つたんですけどね。いまの岩下さんの話を聞いて、やっと数が合いましたよ。しかし、どうしてうちの鮎桶が、403号室なんかにあつたんだろう？」

仕込みを完了した北園が、専用の大きな湯呑でお茶を飲むと首をひねった。

以前は連日一升酒を飲んで、文字通りのアル中だったようだが、肝臓を悪くしてドクター・ストップがかかつてからというものの、この三年間ピタリと禁

酒をしている。

「そのわけは、こうなんだ。出前が届いたんで、リビング・ルームで麻雀卓を囲んでいた一同は、ゲームを小休止して、てんでに鰯を食べ始めた。しかし、堀江一人は自分の分の鰯桶を、ダイニング・キッチンへ運んだものの、食欲がなかったようで、ぜんぜん手をつけなかったそうなんだよ。そして、もったいないからと言って、403号室に電話をかけた後、劇団員の一人佐竹謙三を呼び、杉浦が夕食がまだらしいんで、届けてやってくれないかと、運ばせたんだとき。出前の時間が九時頃だったとすると、九時半頃ということになるわけだな」

「なるほど、道理でね。それにしても、堀江さんと杉浦さんは日頃、懇意な仲だったんですか？」

「ああ、堀江がベランダから落とした洗濯物を、杉浦が届けてくれて以来、親しく付き合うようになっていたみたいなんだ。劇団員の方は、杉浦と顔を合

わせることはなかったが、堀江が403号室をちょくちよく訪ねていたということは、彼自身の口からよく聞かされていたそうだよ」

「それで、劇団員の人が届けたうちの鰯を、杉浦さんは受け取ったんですね？」

「戸口で、無愛想に返事もせずに受け取ったらしい。そのときの杉浦の服装が、何とも奇妙千万で……」

「といますと？」

「いまは桜も散って、四月の末だろう。サングラスはいいとして、春もたけなわだというのに、厚手のコートにマフラー、おまけに御丁寧にもマスクをかけて、手袋まではめていたというんだから、文字通りの冬仕度さ」

「風邪でもひいていたんですかね」

「それにしちゃ、鰯をペロリと平らげてるんだぜ。食欲だけは、すこぶる旺盛だったことになる。鰯泉

の握りが、よつぽど旨^{うま}かったんだろがね」

「嫌だなあ。いつから岩下さん、そんなにお世辞がうまくなったんですか？ それはともかくとして、このところ渋谷中央署と捜査一課も大忙しですね。つい一週間ほど前に恵比寿のスマイル・ストアで、グリコ森永事件を真似た、農薬入り乳酸飲料の脅迫事件が、起きたばかりだというのに……」

「そうなんだ。あれはうちの課のほかの強行班が扱っているヤマなんだがね。犯人に金を騙し取られてから、警察に届け出たんだからな。間が抜けてるったら、ありやしない」

その脅迫事件というのは、こうだった。

一週間前の四月二十日、チェーン店で有名な『スマイル・ストア』に、四十代の中年男の声で脅迫電話がかかってきた。店内の乳製品コーナーに、農薬入りの乳酸ドリンク「ヘルシー」を何本か置いたというのである。

驚いた店長が問題の売場を調べてみると、予告通り農薬入りの「ヘルシー」三本が見つかった。犯人からはつづいて連絡があり、外苑内の逍遙路に停めた、ダーク・グレーのスカイラインの後部シートに、一千万円のキャッシュを入れたアタッシュ・ケースを、窓から投げ込めとの指示があった。

警察に届けたりすれば、売場の食料品に無差別に農薬を混入すると脅されたため、店長は本社の重役と協議した結果、隠密裡に処理することになり、犯人の指示に従って要求された大金を店員に運ばせた。

スカイラインの後部シートの窓は開けてあったが、ナンバー・プレートにはガム・テープが貼りつけられていて、ナンバーが隠してあったという。『スマイル・ストア』では、その後、警察に被害届けを出したのである。

渋谷中央署には既にそちらの捜査本部が設けられ

ているので、今度の殺人事件の発生により、二つの捜査本部が別個に置かれることになるのだった。

「しかしねえ、岩下さん、いまの話を聞くと、杉浦さんの服装が、何ともひっかかるなあ。このポカポカ陽気に厚手のコートとは、どう考えてもそぐわない。発見された死体の方はどうだったんですか？」

北園が煙草に火をつけながら聞いた。

「検死の際に見たら、裸にパイルのガウン姿だったな。八十キロを越す、でっぷりとした見事な肥満体だったよ」

「ますます奇妙な感じがしますね。おまけに堀江さんが自分の分の鮭を、わざわざ届けさせたというのも、何か不自然じゃないですか。食欲がないのなら、最初から注文しなけりゃいいでしょう」

「そりゃそうだな。すると何かい？ マスターは堀江が怪しいとでも」

「めっそうもない。たったいま事件のあらましを、聞かせて頂いたばかりじゃありませんか。だってえのに、プロの旦那の前で、トウシロの私がえらそうに推理なんか、できるわけがないでしょうが」

「しかし、驚いたな。マスターにそんな探偵趣味があるとは、知らなかったよ」

「親父が昔、小樽の警察でデカをしてたんです。その血をひいているのかもしれないね。それにこの稼業に入って、修業期間中にマグロの種類や等級、魚の国産物と輸入物の違い、天然物と養殖物の区別なんかを、みっちり仕込まれましたからね。そのせいで、特別な直感力が働くのかもしれない」

「いずれにせよ、今度の事件は鮭がからんでいるんだ。マスターの知恵を借りなきゃならないことが、まだまだできるに違いない。相談相手になってもうえたら、心強い限りだよ」

「相談相手だなんて、おこがましくてテレちやいま

すがね。捜査に協力するのは市民の義務です。いいえ、ほかならぬ岩下さんが扱う事件とあっちゃ、手伝わないわけにはいかねえでしょう」

北園はねじり鉢巻の頭の後ろに手をやって、柄にもなくはにかんだ笑顔になった。

「現場の鮎桶は、明日にでも君代さんに取りにこさせてくれよ」

「そうします。ですがね、岩下さん」

「何だい？」

「事件のニュースは、今夜の夕刊を改めてじっくりと読みますが、できれば劇団の人が403号室にうちの鮎を届けたときの模様を、もう少しくわしく知りたいんですよ。運んだその人が、何か不審なことを感じなかったかどうか。おつといま一つ。その際、堀江さんが503号室で、どうしていたか。それいつもぜひ知りたいですね」

「わかった。その点は明日にでもマスターに報告す

るよ。何しろ目下のところは、検死と現場検証、発見者や一部の関係者の事情聴取が終ったばかりだね。解剖の方も、結果待ちという状態なんだ。ウィンド・ミルの連中に関してだって、まだ本格的な事情聴取を、行なっていないという有様で」

岩下が答えたとき、表のガラス戸がガラリと開いて、何組かの客が入ってきた。

「らっしやい」

北園が威勢のいい声で迎えたのにつづいて、戸口近くの台の上で電話が鳴り出した。

細君の町子が調理場からあたふたと出てきて、送受器を取り上げる。出前の注文だった。それを受けて切ったとたん、また次が鳴り出した。これからが『鮎泉』の、一日のうちでもっとも多忙な営業時間の、始まりである。

岩下警部補は店内がたてこんできたのを汐に、野武刑事をうながして腰をあげた。

3

翌日の午後、K大病院で行なわれた、杉浦修治の解剖結果が判明した。

被害者の後頭部に、頭蓋骨の陥没骨折があり、直接の死因はハンマーカスパナの類いの鈍器による、撲殺であることが明らかになった。また死亡時間は午後八時から十時までの、約二時間の範囲内と推定された。

だが、『ウインド・ミル』の劇団員佐竹謙三が、403号室に鮎を届けたのが、午後九時半頃であったことから、それ以後午後十時までの、半時間の間の犯行に限定される可能性が強まった。特に岩下が注意を惹きつけられたのは、被害者の胃から検出された内容物である。

それは握り鮎のネタと思われる、イカ、タコ、ホ

タテなどの未消化の魚介類だった。

ふつう和食の食物の場合、食後二時間乃至三時間で十二指腸に送られて、胃の中がからっぽになるというのが、法医学的な常識なのだ。ということは、杉浦が堀江から届けられた『鮎泉』の鮎を食べた直後に、殺害された証明にほかならなかった。その事実をもとにすると、犯行時間の方もなお一層、限定されるのは、いうまでもなかった。

午後の半日近く、強行班三係係長の小西警部とともに捜査本部に居残り、聞き込みに散った捜査員たちからの、連絡の受付役をつとめていた岩下は、夜の捜査会議が始まる一時間ほど前に、署の近くの喫茶店で野武刑事と落ち合った。

野武は下北沢にある劇団『ウインド・ミル』の稽古場に、佐竹謙三を訪ねて帰任したのである。佐竹は劇団きつての二枚目俳優で、五月に代々木公園の屋外で上演する『妖婦サロメ』のヨハネ役を演じる